連載

ああ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市 田宮 治

色んなことがありました…

⑪ ある猟場で起きた事件(3)

●「目には目を」も考える

私は、収まらない気持ちをどこにもぶつけられず、それでも「富士雄号」が無事であったことを喜んだ。そして、「富士雄号」に話しかけながら、暗くなりかけた山道を登り、Kさんと猟友の待つ朝の場所に向かった。２人の顔が見え、「無事に連れ帰ったよ」と告げると、「よかった、よかった」と２人は喜んでくれた。

私は、これから単独猟を始めようという２人には、Sグループとのいざこざは黙っていようと思ったが、私の遅い帰りを案じ「どうしたのですか？」と訊かれ、本意ではなかったが事の顛末を話した。私の説明を聞いたKさんは、「俺も行けばよかったよ」と、心底怒ってくれた。猟友も気持ちはKさんと同じであった。私は、２人の心遣いが嬉しかった。

ちょうどよい機会だと思った私は、２人に「猟道の何たるか」を話して聞かせた。狩猟免許を持つ猟人にとって当然のことであるが、正しい狩猟を行い、共有の財産である猟場を守っていくこと、ルール・マナーに則り狩り進むことが最も大事なことであり、これさえわきまえていれば、何者も恐れることはない…と、ついつい力説してしまった。

Kさんは、これほど近い所に猟道を外れたグループがいることに驚いたようで、「こんな人達が出猟しないような所に出かけますかね」と弱気なことを言った。確かにそうだろう。狩猟を始めた若いハンターが、もし今日のように悪質な締め出しを受けたら弱気にもなり、入山どころか猟そのものまでイヤになってしまうだろう。Sグループは、今日まで自分達の都合だけでヨソ者を排除し続けているのだ。

こうした場合の解決法と言えば、第一に、そんな所へは行かないことであろう。だが、そうすることは、結果的にSグループの思う壺であり、初心者や新たに入山する猟人のためにはならない。

第二は、よく話し合って和解することであるが、このグループに和解などは望めない。なぜなら、責任者を筆頭に皆が「猟道徳」を持ち合わせておらず、ひたすら猟場を独占し続け、外部の人間の入猟を許さないからである。

そこで第三は、中央突破…ということになる。私も「関東猪犬猟

最も大事なことであり、これさえ
うことになる。私も「関東猪犬猟

山彦会」を主宰している。このグループに倍するメンバーと一流犬群20頭も投入し、一猟期同じ猟場で狩り続けたら、勝負の結果は目に見えている。しかし、それこそ猟道に反することだ。イノシシを根こそぎ獲って、イノシシのいない猪山が残ったらどうなる。そんな山に入る猟人などいなくなるだろう。これでは、勝ったことにはならない。

そして第四として、法的手段に訴える道がある。これだけの仕打ちを受けながら、耐え忍ぶこと10余年。その時々の彼らの悪質な言動はしっかり摑んでいる。そこで、双方の言い分を述べ合う「公の場」での対決も辞さず、公平な裁きに委ねることも考えられる。

彼らは、私の狩猟者としての当然の権利を奪い、獲物を横取りし、愛犬まで捕まえて縛りつけたのだ。自分達がとってきた行動の反省とともに、私が受けた精神的苦痛への償いは十分にしてもらわねば気持ちが収まらない。私には、こうした解決法しか今は思い浮かばないのである。

私は、これからも「猟場を守るため」に努力し、「犬芸を楽しむ猟」を続けたいと思っている。基本的には、妻と孫を伴っての「単独猟」である。本誌2005年12月号の特集「猟場を守れ！」にも記述したが、今もって心境は同じである。要するに、「イノシシの生(な)る宝の山」を子孫の代までつなげていきたいと考えているのだ。

私の生来の性格からすれば、こうしたグループには「目には目を」で、猟における実力で対決…となる。狩猟法さえ守っていれば、こちらが何人で押しかけようと、どんな犬を何頭掛けようとも「合法」である。彼らがいかに守ろうとしても、1頭のイノシシもシカもいなくなった山では、どうすることもできないだろう。

数の力で弱い立場の者を追い出す。ならば、弱い者も数を頼りに仕返しを考えてもよいのではないか。大勢ゆえ、私が追っているイノシシにマチをかけて撃ち獲ることもできた。追っている犬を捕まえることもできたのだ。だが、こちらの人数が増えれば、彼らとて迂闊に手は出せないだろう。その結果として、自らの悪行を反省させる以外に猟を続ける途はない。

今もって、このグループからは何の反省の弁も届いていない。来る今猟期は、本気で立ち向かうことも考えている。

◆ ◆

かくして大事な2日間は終わった。この事件さえなければ、完璧な2日間であったのだが。

ご存じのように、イノシシを追って犬群が割れた場合でも、優秀な犬群なら、必ずいずれかの犬の「止め鳴き」で寄り付いて、さらにもうひと勝負、「勝ち戦」ができるのである。そう考えると、今回の事件さえなければ…と、残念でならなかった。Kさんと猟友には、その辺を詳しく教えてあげたかったのだが。

それでも、あそこではもう少し早く下に跳べば…とか、あの寝屋ならこの狩り方が一番…とか。そして、何よりも大切なことは、犬群を思いのままに寝屋に導くことであること。主人は犬群のボスであるから、いかなるときでも真っ先に立ってイノシシと闘い、犬群を励ましエールを送り続けること。いかなる状況下でも、最後まで諦めずに挑み続けること。今回の事件で尻切れトンボになったが、これら

「ブル号」(左)と「クマ子号」の兄妹犬

単独猟の相棒の孫と

のことを説明した。

Kさんは、私の話を実によく聴いてくれた。また、彼の取り巻きの方々も皆立派な猟歴を持ち、猟に取り組む姿勢はもちろん、人格も優れている。特に「会長」と呼ばれ、親しまれている方は親分肌で、今回の事件を聞いて私に同情してくれ、大いに憤慨されていたという。私は、この立派な方々を今回の事件に巻き込んではいけないと強く思った。

その後Kさんは、私の犬群に惚れ込み、私が残した「富士雄号」と「クマ子号」の間に生まれた牡犬をどうしても欲しい…と言うので引き取ってもらった。話によれば、その後のKさんは好調な猟果で、この猟期初めての猪狩りにもかかわらず、20頭以上も大猪を獲ったとのことだった。来る18年度猟期は、Kさんの一軍犬群に、「富士雄号」と「クマ子号」の子であり、私が名付けた「サブ号」が入った姿を見るのを今から楽しみにしている。

●和解の努力はしたが…

後日、私は悪質なグループの中で、ただ一人「Kです」と名乗ったK氏の住所を東京都猟友会の名簿で探した。その名前は、H支部の名簿で見つけることができた。私は彼を訪ねることにした。この問題をいつまでも引きずりたくはなかったが、このまま放置できる問題ではなかったからだ。

私は、対談の要点を整理しながら、暗くなった道を辿ってK氏宅を探し当てた。突然の訪問であったが、お互い顔を合わせるとすぐにわかった。私がK氏を訪ねたのは、Sグループの責任者の名前を訊きたかったからである。どうしても自らの名前を名乗らなかった責任者の、1月8日の言動を思い返すたびに納得がいかず、決着をつけたいと思ったからだ。

この日の前に、私は責任者の名前を知りたくて、群馬県の猟友会に問い合わせ、事情を説明したのだが、責任者どころかS支部の会長の名前さえ教えてもらうことができなかった。様々な圧力や根回しがあったのだろう。そんな経緯から、「東京でまた…」と言われたK氏宅への訪問であった。

K氏とは、色々な猟談義から始まり、今回の事件の核心でもあるSグループから受けてきた悪質な嫌がらせについて、実に3時間もかけて話したが、事情は理解してもらえたようだが、K氏からは詫びの言葉もなく、とうとう責任者の名前も教えてはもらえなかった。

そして、「彼らも決して悪気があってのことではありません。猟犬を捕まえるのは、あの村辺りでは常識です」と言う。私は、「他人の猟犬を捕まえるのがどうして常識なのですか？　具体的に説明してください」と詰め寄った。

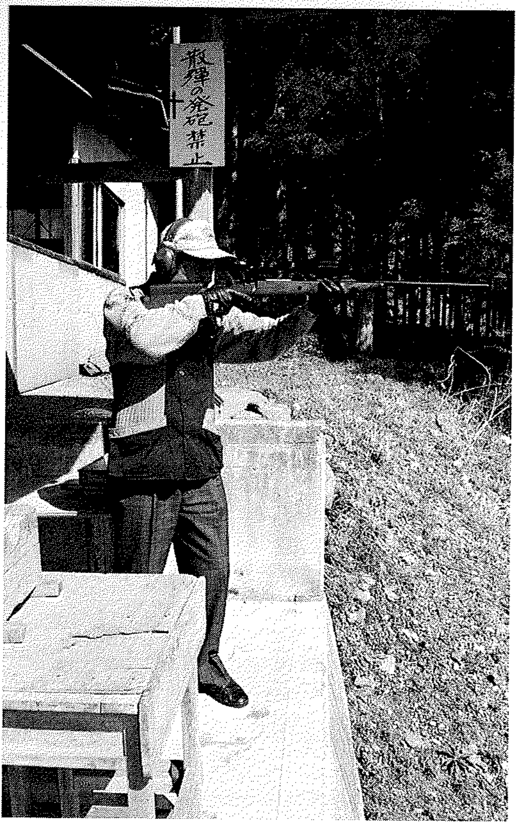
Sグループは、今回のことでも事前に策を練って計画的に猟犬を捕まえ、それを人質（犬質）にして伝達者を差し向け、やがて駆けつけるだろう私を手ぐすね引いて待ち受けていたのである。

そのことと、これまでSグルー

この子達の中から将来の名犬が出てくれたら…と願う

東明は、Kさんの一事大群に、「言ブが私に投げかけた罵詈雑言の数々、「S支部に連絡し、承諾を得てから入山しろ」に始まり、「毒で犬が死んでも知らないぞ」「罠に掛かって犬が死んでも知らないぞ」「飼い猪に犬が飛びかかり殺してしまうので、猟犬を放すな」、挙げ句の果ては「何でもいいけど、迷惑だから来るな」等々をK氏に話した。

「Sグループの人達は、いったい何様のつもりですか?」と、その真意をK氏に質した。K氏は、長年Sグループの猟に参加し、自らもグループを持ち、その会長でもあるという。東京H支部においても、指導的立場の人である。そ


何事も訓練が大事

長の名前さえ教えてもらうことがのK氏の人格に問うつもりで、実例を挙げて氏の考えを伺った。

しかし、私の期待に反して、何を話しても「いや、彼らは良い人達で、そんなことはないはずだ」と言う。私には、K氏の返答が全て言い訳のように思えてきた。さらに具体的な例を挙げて詰め寄ると、K氏は言葉に詰まりながらも「それは、よそのグループだよ」と言い張る。立場上、そう言わざるをえなかったのかも知れない。

K氏は、今回の「富士雄号」を捕まえたことについても、こう説明した。

あの辺りではイノシシを飼っていて、今猟期にヨソから来た猟者

ださい」と詰め

の犬が飼い猪を咬み殺して逃げたが、その飼い主は「Sグループがやった」と言ってきた。本当に迷惑な話である。そんなことがあって、「ヨソ者は入山するな」とか「猟をするな」「猟犬を放すな」と言っているので、決して悪気があってのことではない。猟犬を捕まえるのは、飼い猪に咬み込む前に捕まえるのであり、あの村辺りでは常識になっている…と、堂々と正当性を述べていた。

私は、K氏の考えはおかしいと思ったので、飼い猪はどこで飼われているのか、飼い主は何という方か訊ねたが、これにも答えてもらえなかった。私のその後の調べでは、イノシシを飼っているのはSグループのようだ。飼い猪の場合は、届け出が必要になるはずであり、きちんと檻や柵内で飼われ、逃げ出すことはできないはずである。そのイノシシを、いかに一流芸の犬であっても、めったに咬み殺せるものではない。

この後もS猟区で起きた色々なことをK氏に話し、この10余年、卑劣な方法で脅され続けてきた本人である私が、今こそ行動を起こさなければ、この先もこうした事件が起こり続けるであろうこと、もしかしたら取り返しがつかないことにもなりかねないことを告げたが、K氏はSグループをかばう発言に終始した。私は、「今度は黙っていませんよ」の言葉を残してK氏宅を後にした。（この項完）

＜編集部より＞

田宮氏の文章は、この後も実例を挙げて続いているが、編集部の責任において、あえてここで切らせていただいた。今回、3回に亘っての田宮氏の記述は、紛れもなく事実であろうし、その怒りの感情は察して余りある。それゆえ、できるだけ原稿に忠実に掲載したつもりである。

今回の出来事（あえて「事件」と表現させていただいたのは、読者に危機感を持っていただくためであった）は、いかなる猟場においても起こり得ることであるが、本稿を採り上げたのは、決して一グループを糾弾するためではないことをお断りしておく。

悪化する狩猟環境の改善、およびの狩猟道徳欠如の中で、本稿が狩猟の永続を願う人達への光明の一石になれば…との思いからである。本稿への反論、編集部へのご意見を心よりお待ちする。（T記）